



◇カタチは可愛いけど、悪さをする 「肺炎球菌」について



☑肺炎球菌とは？

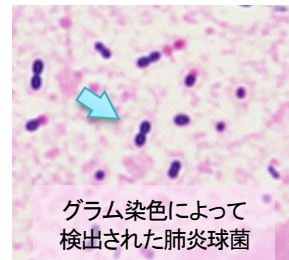
肺炎球菌は肺炎や髄膜炎を引き起こしてしまう細菌であり、市中肺炎（通常の社会生活を送っていてもかかる肺炎）の主な原因菌です。菌の形態は、2つの球状の菌体が張り付いた形の双球菌で、莢膜（きょうまく）と呼ばれる**厚い膜で覆われているため、体のもっている免疫力が働きにくいのが特徴**です。通常、鼻やのどの奥にすることがあり、免疫力の低下などをきっかけに重い病気を起こすことがあるので、気を付けたい細菌のひとつです。肺炎球菌性肺炎の症状は、悪寒(おかん)、発熱、頭痛、咳、痰を5大症候とし、そのほか全身倦怠感、食欲不振などの全身症状がみられます。



☑検査

当院では、尿から肺炎球菌の莢膜抗原を調べる検査と、喀痰等の材料より肺炎球菌を顕微鏡で直接観察する検査（グラム染色）を行っています。

尿を材料として検査する理由は、肺炎球菌の感染時には血液中に莢膜抗原が移行し、尿に排泄されます。**尿中に排泄される莢膜抗原は腎臓によって濃縮されるため、血液よりも尿の方が検出やすくなるためです。**検査開始から約15分程度で結果が判明し、的確な治療薬の選択が可能になります。



グラム染色によって検出された肺炎球菌

さらに詳しい検査では、喀痰等を培養することで原因菌を特定し、発育した菌に何種類かの抗菌薬（抗生物質）の効き具合をテストする「**薬剤感受性試験**」を行っています。この検査を実施することで、患者さんにとって安全で効果の高い最適な治療薬を選択することが可能となります。

☑治療

通常は、ペニシリンまたはセフェムという抗菌薬が用いられます。ただし、近年はペニシリンが効かない、**‘耐性’の肺炎球菌が増えてきています。**抗菌薬の約60%が肺炎球菌に効果がないとの報告がなされている現状からも、前述の「**薬剤感受性試験**」を実施することが重要といえます。

☑予防

予防にはワクチン接種が効果的です（予防接種）。平成26年の10月より肺炎球菌ワクチンが定期接種になりました。65歳の方が対象となりますが、平成30年度までの経過措置として、70歳、75歳、80歳など5歳刻みに、各年度に各年齢になる方が定期接種の対象となります。その他の年齢層の方は任意接種による接種を受けることができます。任意接種は原則、自己負担となりますが、自治体により助成している場合がありますので、お住いの自治体にお尋ね下さい。



肺炎は、日本人の死因の中でガン、心臓病に次いで第3位です。また、肺炎による死亡者の約95%は、65歳以上になることから、積極的に予防接種を受けましょう。（加用）

※)薬剤感受性試験は、四万十市内の医療機関の中で当院のみが院内で実施している検査です。

◆尿の泡立ち 方から考えられること…

勢いよく出たおしっこは、泡立っていますよね。その泡は、すぐに消えますか？そんなにじっくり見ていなくても、普通はものの数秒で消えてしまいます。炭酸の泡が弾ける感じです。

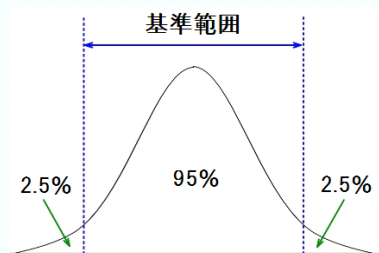
“いつまでたっても泡が消えない”というおしっこは、出てはいけな**い『蛋白』**という成分が尿中に^①出ている可能性があります。蛋白が尿中に出てきてしまうことは、**腎臓のろ過する働きが低下しているということです。**泡立ちが毎日続くようであれば、腎臓や尿路(尿の通り道)に病気があるかもしれません。気になる方は、泌尿器科または内科で尿検査を受けてみてはいかがでしょうか。



健康な人でも、激しい運動後や疲れているとき、ストレスなどで尿蛋白が陽性になる場合がありますが、このように一時的なものであれば心配する必要はありません。（山沖）

☆検査値の基準範囲（正常範囲）とは…

検査値を判定するためには「物差し」となる**基準値(範囲)**が必要となります。その**基準範囲**とは、「**正常な人の95%が当てはまる値**」とされています。大勢の健康な人々を集めて血液や尿の成分を測定し、得られた測定値と頻度(人数)



の分布を図に表すと左右対称の釣り鐘状となります。この山のような分布図が示した**す野の左右2.5%を除いた95%が収まる上限値と下限値の間が基準範囲**となります。この値をはずれたものが、**即病気の有無を示すものではありません。**血液や尿検査の結果は、年齢や性別、食事、運動などの条件で変動します。自分自身の基準値や目標値を理解することも大事であるといえます。（前田）

◀わが検査室のスタッフ紹介▶

地域の医療に貢献すべく、**‘確かな知識と技術’**をモットーに頑張っています…



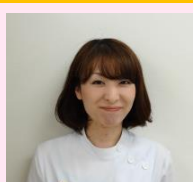
血液検査
前田祐仁



細菌・輸血検査
加用清美



生理検査
島崎志保



生化学・免疫検査
下村明子



一般検査
山沖亜衣

【検査室ぶちニュース】

★マダニの刺咬による感染症‘重症熱性血小板減少症候群’が、当院でも春以降に2例の患者さんからみられました。野山に出かけた後に、発熱などの症状が出た場合は、速やかに医療機関で受診しましょう。